

校長室からのお知らせ

9月17日 NO.20

岸和田市立山直北小学校
校長 尾野 武志

おじぎ

先日、南海バスに乗ったときのできごとをお伝えしたいと思います。

「子どもか！」と突っ込まれるかもしれませんが、運転手さんの横の一番前の座席に、57歳になっても座りたくて、狙っています。今回のお話は、一番の特等席を狙って座れたから体験できたと言えますので、子どもじみた振る舞いをお許し願います。

停留所に着き、年配の女性の方が降車する際に、運転手さんに「快適な時間を、ありがとうございます。」と小声でおっしゃっているのを聞きました。「ありがとう。」や「ありがとうございます。」など、お客さんが運転手さんにお礼を言うのは何度も聞いたことがありますし、私自身も言葉で伝えることが多いのですが、「快適な時間」の一言があるかないかは大きな違いがあると思いました。相手を不快にする余計な一言を私は数えられないくらい言っていますが、相手の気持ちを心地よくさせる貴重な一言を伝えたことはないと感じました。とても素敵な年配の方だなと思いましたが、実は続きがあります。

その年配の女性は、バスの進行方向と同じ道を歩いておられましたが、バスが通り過ぎるタイミングで、歩みを止め体をバスのほうに向けてやわらかな表情でおじぎをされました。「参りました。」しか言えないほど、その年配の女性に心を動かされました。多分、その方にとっては当たり前のごくごく自然な振る舞いの一つなんだと思います。

時間にすれば、5秒もかからない一瞬のことだと思いますが、その振る舞いはバスの運転手さんにとって、とても素敵な瞬間になったのではないかと勝手に信じています。

おじぎ一つで、人を幸せな気持ちにさせることができる魔法を見たような気になりましたが、バスの待ち時間に汗だくになり、3分程度バスが遅れたことにちょっと腹立たしく感じていました私には、決して真似ができないとも思いました。常日頃から感謝の気持ちを持ち続けなければ、「快適な時間」の一言も「おじぎ」も不自然になってしまうと思います。反省しています。